

《研究ノート》

プラグマティズム思想史の構築に向けて

加 賀 裕 郎

I

プラグマティズム思想史に関する研究としては、古くはJ. デューイの“The Pragmatic Movement of Contemporary Thought”(1909)から、L. メナンドの *The Metaphysical Club*(2001)まで数多くある。日本におけるこの分野の研究としては魚津郁夫『プラグマティズムの思想』(2006)が優れた成果として挙げられる。

これらのなかで、魚津の研究ではCh. モリス、W. V. O. クワイン、R. ローティといった20世紀半ば以降に活躍した哲学者も取り上げられているが、他の優れた研究は古典的プラグマティストを中心に扱っている場合が多い。しかし20世紀半ば、デューイの死とともに影響力を失ったかに見えるプラグマティズムは、1980年代以降、再び活力を取り戻し、現在、新たな展開を遂げつつある。1980年代以降の代表的プラグマティストは、分析哲学から出発したローティとH. パトナムであったが、現代では、その次の世代であるR. B. ブランダム、H. プライスといった哲学者が中心的地位を占めるようになりつつある。彼らのうちブランダムはカントやヘーゲルに接近し、「合理主義的プラグマティズム(rationalist pragmatism)」を展開する。Priceは考察の対象を言語的問題に限定するとともに、反表象主義を徹底させる。

論者の問題関心は、パース、ジェイムズ、デューイといった古典的プラグマティストからクワイン以降の分析哲学的なプラグマティスト、さらにブランダムやプライスといった現代のプラグマティストに至る全体の動態を、どのように解釈したらよいかということにある。プラグマティズム研究の一般的特徴として、古典的プラグマティズムの研究者と分析哲学に軸足を置くプラグマティズム研究者では、自ずとプラグマティズム思想史の解釈に乖離が見られる。古典的プラグマティズムの研究者は分析哲学に軸足を置くプラグマティズムを無視ないし軽視しがちであり、逆に分析哲学に軸足を置く研究者は古典的プラグマティズムを無視ないし軽視しがちである。しかし我われは、古典的プラグマティズムから分析哲学に軸足を置くプラグマティズムの展開に、あるていど一貫した流れを読み取りたい。

「プラグマティズムの一貫した流れ」の解釈には、これまでにも興味深いものが幾つかあった。古くはB. ラッセルとかM. ハイデガーに共通の理解であって、それは「19世紀前半のイギリス功利主義の、19世紀後半におけるアメリカでの反響」(Brandson, p. 35)である。そこで反響されているのは、「利害得失の比較という還元的レンズを通してあらゆるものを見る粗野な商人の感性」(Brandson, *Ibid*)である。

ラッセルとかハイデガーに見られるプラグマティズム解釈は現在、完全に消えたわけではない。しかしもしプラグマティズムの本質がラッセルとかハイデガーが解釈したようなものであ

るならば、プラグマティズムが20世紀後半以降、現代思想を代表するものに含まれることは説明できない。現代におけるプラグマティズムの発展を説明するためには、ラッセルとかハイデガーとは異なるプラグマティズム解釈の視点が求められる。それでは、そうした視点とはどのようなものであるだろうか。

我われは有力な解釈視点の候補を、既に幾つかもっている。その一つはクワインの解釈である。クワインはプラグマティズムを経験主義の伝統に位置づけるとともに、それを経験主義が進化する五つの転換点の最後に位置づける。第一は観念から語句への推移である。第二は意味論的焦点の名辞から文への推移である。第三は意味論的焦点の文から文体系への推移である。第四は方法論的一元論あるいは分析—総合の二元論の放棄である。そして第五は自然主義あるいは科学に優先する第一哲学という目標の放棄である。クワインの解釈視点では、プラグマティズムは経験主義的伝統の頂点であり、その内実とは認識論的全体論と自然主義である。

二つ目はローティの解釈である。ローティによれば、近代哲学の主流をなすデカルト—ロック—カント的伝統が基礎づけ主義的であったのに対して、L. ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、デューイは基礎づけ主義に反対し、「構築的というよりも治療的、体系的というよりも啓発的な」(Rorty, 1979, p. 5) 哲学を志向した。彼らは知識の基礎という概念、哲学は認識論的懐疑論者に応える課題を担っているという概念、特殊な研究対象としての「心」という概念を退けた。彼らは知識論とか心の哲学という課題そのものを否定した。この解釈ではデューイを含むプラグマティズムは、近代哲学の主流をなす基礎づけ主義を退けるだけでなく、認識論とか形而上学といった分野自体を否定する思想動向——とりもなおさず大文字の哲学(Philosophy)を葬り去る思想動向——である。

三つ目は、この書評で扱うブランダムの解釈である。ブランダムによれば、プラグマティズムは18世紀哲学における「第一の啓蒙」に対して「第二の啓蒙」として捉えられる。「第一の啓蒙」のパラダイムはニュートン物理学であり、それは普遍的、必然的で永遠の原理に基づくとされた。それに対して「第二の啓蒙」では、理性重視という点では「第一の啓蒙」と同様であるが、そのパラダイムはダーウィン生物学であり、それは偶然的、確率的、統計的原理に基づくとされた。

最後に、プラグマティズム思想史の動態に関して、かつて我われが提示した解釈を示しておこう。我われは先ずプラグマティズムを、J. ハーバーマスの言う「ポスト形而上学的思考(nachmetaphysisches Denken)」の一形態と考えた。「形而上学的思考」は、第一に多様性の根底に自己同一的実在を措定し、多様性をその派生態とすることによって世界の統一性を確保しようとする「同一性の思考(Identitätsdenken)」、第二に自己同一的実在をイデア的なものと同一視する「イデア論(Ideenlehre)」、第三にイデア的な自己同一的実在を認識するために、理論的・観想的態度を重視する「強い理論的概念(der starke Begriff)」から構成される。ハーバーマスによれば、プラトンを源流とする形而上学的思考は、ドイツ観念論を頂点として、それ以後、解体に向かう。こうした解体過程の思考が「ポスト形而上学的思考」であり、その思考は「脱超越論化(Detranszendentalisierung)」という特徴をもつ。我われの見解では、プラグマティズムは、プラトンに始まる形而上学的思考がドイツ観念論で頂点に達し、それ以後解体に向かう

脱超越論化過程の哲学的帰結の一つである。この見解の意味を簡潔に述べてみよう(加賀他編2009bを参照)。

プラトンに始まる形而上学的思考を「プラトン主義」と総称しよう。プラトン主義とは「我われの認識と我われの言語には依存しないが、我われの言語によって適切に表象しようとする何かが存在する」(ローティ)と主張する立場である。我われの言語が精確に表象しようとするのが実在であり、言語と実在が対応関係にあることが真理である。プラトン主義の真理観はメタファとしては「明瞭に見ること」である。

西洋哲学史を通じて支配的であったプラトン主義的伝統を壊したのがカントである。何故ならカントは真理を「明瞭に見ること」から「表象連関の秩序づけ」の客観性の問題に変化させたからである。カントにとって観念は「実在を写す鏡」ではなく、「実在を構成する力」である。観念を鏡ではなく力であると説く立場、したがって観想に対する実践の優位を説く立場がプラグマティズムであるから、カントは元祖プラグマティストと言ってよい。

ただしカントは、表象連関の客観性を保証する枠組み=力がア prioriに固定されたものだと考えた。カントが真のプラグマティストになるには、もう一步踏み出す必要であった。次の一步を踏み出したのがヘーゲルである。ヘーゲルは、前述した枠組み=力を「公共的な社会認識実践」(ブランドム)の過程にあると捉えた。ヘーゲルの立場からデューイの立場への距離は近い。ヘーゲルがプラグマティズム的側面を持っていたのは明らかである。

ただし Kant からプラグマティズムへの道は、もう一つある。それは枠組み=力を「公共的な社会認識実践」と捉えるのではなく、幸福と快樂の獲得のための道具と捉えることであり、これはジェイムズのプラグマティズムに結びつく。以上のように、プラグマティズムはカントを原型とし、一つの系譜ではヘーゲル-デューイと繋がる公共的-社会的プラグマティズムと、もう一つの系譜では、ジェイムズ-ローティと繋がる個人主義的プラグマティズムがある。プラグマティズムは、これら二つの系譜のせめぎあいとして発展してきた。以上に述べたプラグマティズム思想史の解釈視点から、近年刊行された三つの著作を評価しようとするのが、本研究ノートの目的である。

II

先ず岡本裕一郎の『ネオ・プラグマティズムとは何か——ポスト分析哲学の新展開——』を見てみよう。著者自身が述べるように、本書は本邦初のネオ・プラグマティズム入門書である。しかし本書はプラグマティズム通史というよりも、副題が示すように、分析哲学の展開に考察の中心を置き、その展開過程で現れたポスト分析哲学をネオ・プラグマティズムとする解釈から構成されている。それでは何故、ポスト分析哲学がネオ・プラグマティズムになるのだろうか。

著者はポスト分析哲学への転換点となった三つの論文を挙げる。一つがクワインの“Two Dogmas of Empiricism”(1951)、二つ目がウィトゲンシュタインの *Philosophische Untersuchungen*(1953)、三つ目が W. セラーズの *Empiricism and the Philosophy of Mind*(1956)である。これら三つの研究は1950年代の前半から半ばにかけて公表されているので、分析哲学のポスト分

析哲学＝ネオ・プラグマティズムの転回の端緒は、1950年代にあったことになる。

この端緒は、ローティによってネオ・プラグマティズムとして具体化される、というのが著者の見解である。我われの観点からも、こうした著者の解釈に大きな異論はない。確かに Rorty 編集の *The Linguistic Turn* (1967), *Philosophy and the Mirror of Nature* (1979) は分析哲学のプラグマティズム的、解釈学的転回への画期となった著作であるだけでなく、さらに広くデカルト－ロック－カント的な基礎づけ主義への根本的批判となった著作である。著者によれば、ローティの立場は基本的に、アンチ基礎付け主義、アンチ表象主義、アンチ本質主義である。この指摘も正しい。ただしローティのプラグマティズムを「ポストモダン時代のプラグマティズム」(岡本, p. 53) と形容するのは如何なものであろうか。ローティ自身は「ポストモダン」という概念を意味内容が不明確であるとして斥けているし、特にその政治哲学の内実はハーバーマス、ロールズなどと大きく異なるものではない。ローティの特徴は、彼らと類似の政治的立場を「基礎づけなしに」是認するところにある。

ところで本書の特徴は、ローティ以後の展開過程に関する論述にある。著者はローティによるネオ・プラグマティズムの成立を論じた後、第3章「ネオ・プラグマティズムの体系化」で、ブランダムを中心に取り上げている。ブランダムはローティの教え子であり、言語論的転回後の「分析的プラグマティズム (Analytic Pragmatism)」を精力的に展開している。さらにブランダムはカント、ヘーゲルを中心とするドイツ観念論と積極的対話を重ねている点でも、英米哲学とヨーロッパ大陸哲学の積極的対話を試みた恩師のローティと共通している。しかしプラグマティズムの発展史という視角から、J. ハーバーマスや R. バーンスタイン、パース的プラグマティストである S. ハークや Ch. ミザクなどが取り上げられていないのは物足りない。

ただし著者は、第3章の「3 コミュニケーション行為の理論か規範的プラグマティズムか」において、ブランダムとハーバーマスを比較検討している。著者は両者の間に理論的親近性を感じているが、論者はこれに同意する。ブランダムは社会的認識実践のうちに陰伏的に含まれる規範を「陽表化 (explication)」しようとするが、これはコミュニケーション的行為の理論の基本的立場と一定の理論的親近性が認められる。ハーバーマスは近年、自らの立場を「カント的プラグマティズム (der kantische Pragmatismus)」と呼び、ブランダムは自らの理論的志向性をプラグマティズムと合理主義の総合と規定する。ハーバーマスが *Wahrheit und Rechtfertigung* (1999), *Kommunikatives Handeln und detranszendentalisierte Vernunft* (2001) などでブランダムを取り上げているのは理解できる。

第3章以上に特徴的なのは、第4章で J. マクダウェルを、第5章で環境プラグマティズムを扱っていることである。プラグマティストと呼ばれる人々が、ある本質的思想を共有しているわけではないので、マクダウェルをプラグマティストと呼ぶことが、必ずしも不当というわけではない。しかしプラグマティズムを扱った類似書で、マクダウェルを扱った例は少ない。むしろマクダウェルの問題意識は、経験主義と客観性の問題にあるのではないか。マクダウェルの問題意識を、我われなりに敷衍すれば、次のようになる。

クワインの “Two Dogmas of Empiricism” は理論文と観察文、分析文と総合文の峻別を斥け、それらの区別を程度問題に還元したけれども、彼自身は経験主義の立場を堅持した。しかしク

ワイン以後の、D. デイヴィドスンによる図式-内容の二元論の否定、セラーズによる「所与の神話」の否定は経験主義を維持困難にする。経験主義が維持困難になれば、言明の客観性は如何にして保証されるのだろうか。言明が経験との照らし合わせによって客観性を保証されるわけではなく、経験自体が言語空間、理由空間の事柄だとすれば、如何にして我われは世界と直接に接触することができるのか。この問題設定は重要なものであるが、必ずしもプラグマティズムに固有なものではない。

本書の最後に取り上げられる環境プラグマティズムも、『ネオ・プラグマティズムとは何か』という標題に照らして、違和感をもつ。とはいえ本書は、分析哲学の観点からのプラグマティズム思想史への出発点としての意義を失わないと判断される。

Ⅲ

『ネオ・プラグマティズムとは何か』と同時期に出版された M. ベーコンの *Pragmatism: An Introduction* は、パース、ジェイムズからブランダム、プライスまでを公平に、また体系的に考察している。

岡本はポスト分析哲学としてのネオ・プラグマティズムの形成、発展を論じたが、ベーコンは逆にプラグマティズムの発展という観点から分析哲学を照射している。プラグマティズム思想史についての多くの論述では、デューイの死後、プラグマティズムは哲学界の視野から消え分析哲学が主流を占めるようになったが、ローティの *Philosophy and the Mirror of Nature* とともに、プラグマティズムが復活したと述べる。これは時に「失墜物語 (eclipse narrative)」(R. タリス) と呼ばれることがある。しかしベーコンは、この物語に批判的である。その理由の一つは、重要な分析哲学者は古典的プラグマティストが取り組んだ問題に取り組み続けたということである。例えば古典的プラグマティストは、無媒介的知識 (immediate knowledge) に基礎を置かない知識の可能性を追求したが、これはデューイ以後の分析哲学の課題でもあった。したがって重要な分析哲学者の多くはプラグマティスト的伝統に貢献した。このことは、デューイの死とともにプラグマティズムが消滅したという「失墜物語」と相容れない。

ベーコンが「失墜物語」を批判する第二の理由は、プラグマティズムと何人かの分析哲学者とが密接に関連していることである。ベーコンが念頭に置いているのは、プラグマティストであるとともに様相論理学の開拓者であった C. I. ルイスであり、ルイス以後のクワイン、セラーズ、デイヴィドスンである。第三の理由は、「失墜物語」ではデューイのプラグマティズムを、その立場の典型と見なしているが、実際にはプラグマティズムは多様だということである。特にパースに力点を置くプラグマティズムの系譜が認められる。

「失墜物語」に反対する三つの理由を我われなりに纏めると、プラグマティズム的主題は20世紀を通じて連綿と追求されてきたのであり、20世紀半ば以降、その主題は分析哲学の訓練を受けて人びとによっても担われるようになったということである。またプラグマティズム的伝統は一枚岩でなく、その中に多様な系譜が存在するということである。プラグマティズム思想史のための基本的視座として、このようなベーコンの捉え方は参考になる。

プラグマティズムの多様な系譜については、これまでも様々に指摘されてきた。ベーコンは

N. レッシャーによる区別、すなわちパース、パトナム、ハークを含む、真理と客観性に忠誠を誓うプラグマティズム右派(pragmatism of the right)と、主観主義的でポストモダンの相対主義者である、ジェイズムとともに始まりローティに至るプラグマティズム左派(pragmatism of the left)を引き合いに出す。レッシャーの区別は、前述した我われの見取り図、すなわちヘーゲル、デューイ的な公共的-社会的プラグマティズムと、ジェイズム、ローティ的な個人主義的プラグマティズムの系譜のせめぎ合いという見取り図とも、ある程度重なる。

ペーコンによれば、上述の二つの系譜はブランダムによって統合される。この統合は自然主義と歴史主義の統合ということになる。自然主義はプラグマティズム右派、歴史主義はプラグマティズム左派に相当し、それらを統一的に扱おうとするのがブランダムの哲学的ヴィジョンということになる。そこで次に、ブランダム自身のプラグマティズム思想史観を見てみよう。

IV

ブランダムはローティの弟子であるとともに、著名な思想史家 B. カクリックの教え子でもあり、ここで取り上げる著作も、思想史家としてのブランダムの力量を窺わせるものである。

ブランダムのプラグマティズム解釈の最大の特徴は、ドイツ観念論をプラグマティズムのルーツと見なすことである。ブランダムの表現を使えば、「カントが経験主義と合理主義を総合したように、またプラグマティストが自然主義と経験主義を総合したように、私の進み道は——境界設定問題に対する合理主義的応答というかたちで——プラグマティズムと合理主義を総合することだ」(Brandom, p. 32)。プラグマティズムと合理主義の総合というブランダムの目標は、プラグマティズムの思想的伝統とは馴染みにくい。実際、我が国でブランダムに注目しているのはプラグマティズム研究者よりも、ドイツ観念論研究者である。逆から言えば、合理主義的プラグマティズムというブランダムの立場は、それだけ独創的である。

ブランダムのプラグマティズム思想史の見取り図は、およそ次の通りである。カントとヘーゲルは、いわば元祖プラグマティストであり、それがアメリカでは古典的プラグマティズムとして発展した。ブランダムは古典的プラグマティズムを「第二の啓蒙」、「自然主義と経験主義の総合」、「道具的プラグマティズム」などという視角から解釈するが、これらのうちブランダムは「道具的プラグマティズム」を批判し、合理主義的プラグマティズムに向かう。その際、重要な哲学者としてセラーズと、ブランダムの恩師であるローティが検討され、最終的に分析哲学とプラグマティズムを融合させた分析的プラグマティズムが姿を現わす。

前述したように、ブランダムのプラグマティズム思想史解釈で目を引くのが、カントとヘーゲルを元祖プラグマティストと捉えることである。カント以前の合理論的、経験論的哲学において、意識と経験の最小単位は名辞であったが、カントはそれを判断とした。概念は判断における寄与という観点から捉えられた。我われは判断を下すことにおいて、一定の責任を負い、判断の対象にコミットする。これはカントにおける「規範的転回」と呼ばれ、カントを「還元的-記述的な性向行動主義者」から区別する根拠となる。カントにおける「規範的転回」は人間と動物の境界設定問題において明瞭になる。人間の意図的行為とか判断は、我われが当該の判断にコミットし、責任を負うことであり、この次元は動物に見られない、人間独自のもので

ある。したがって人間の認識や判断を、動物の行為に還元しようとする「還元的－記述的な性向行動主義者」は否定される。

それではカントが元祖プラグマティストとされる理由は何か。ブランダムによれば、それはカントが「内容を力によって理解する」からである。概念規範の内容とは、その力(働き)である。これは 'knowing that' を 'knowing how' によって、「意味の理論」を「使用の理論」によって理解することを意味する。

カントは、こうした概念活動に陰伏する概念規範を陽表化しようとした。カントにとって概念規範は非歴史的、無世界的なものであったが、ヘーゲルはそれを公共的、歴史的な社会認識実践と捉えた。公共的、歴史的に形成される概念規範の動態は、経験(Erfahrung)と呼ばれる。ブランダムは、プラグマティストの経験概念が、ヘーゲルの経験概念を受容し、自然化したと考えているようである。何故ならブランダムは次のように述べるからである。

初期の経験主義者は経験を、連合、比較、抽象のような過程を介して、学習のための原材料を供給する意識的エピソードの生起と考えていた。プラグマティストにとって、経験は学習過程へのインプットではない。経験はまさに学習なのである(Brandom, p.7)。

イギリス経験論における経験は、学習のための原材料を提供するエピソードであり、それはヘーゲル的な経験ではなく、体験(Erlebnis)または感覚(Empfindung)である。ErlebnisやEmpfindungからErfahrungへの移行は、イギリス経験論からプラグマティズムへの移行と重なり合う。

以上のように、ブランダムはカントとヘーゲルを元祖プラグマティストと見なすが、そこでのプラグマティズムは「根本的プラグマティズム(Fundamental Pragmatism)」と規定される。その骨子は、「物事はしかじかである」という信念の意味は、何かを行うという実践能力によって理解されるべきだ、ということである。したがって日常的思考から理論物理学者の思考に至るまで、推論的志向性(discursive intentionality)は実践的志向性(practical intentionality)の一種と見なされる。

ブランダムによるプラグマティズム解釈の次の特徴は、それが「第二の啓蒙」と捉えられることである。18世紀における「第一の啓蒙」のパラダイムはニュートン力学であり、そこでは普遍性、必然性、永遠性が鍵概念であったが、「第二の啓蒙」のパラダイムはダーウィンの進化論の生物学であり、そこでは特殊性、確率、偶然性などが支配的である。メナンドの名著*The Metaphysical Club*は、プラグマティズムのルーツを南北戦争に対する知的反応と見る。南北戦争の教訓は、「確実性は暴力に至る」ということであった。そこでプラグマティズムは確実性の探求を批判し、法則の確率的・統計的性格、可謬主義、多元主義を支持した。ブランダムは、プラグマティズムの原点に関するメナンドの解釈を支持する。

以上のように、ブランダムは古典的プラグマティズムを高く評価する。ブランダムによれば、古典的プラグマティズムは次の点で革新的である。①ダーウィン主義、進化論的自然主義、②存在論における自然主義と結びついた経験主義/ErlebnisではなくErfahrungとしての経験

／表象 (representing) と介入 (intervening) の表裏一体的把握, ③認識論的問題に対する意味論的問題の優先／学習における役割によって内容を理解, ④意味論的概念の規範的性格, ⑤概念内容についての機能主義, ⑥説明の順序として, 理論的認識より実践的認識を特権化。

しかしある地点で, ブランダムは古典的プラグマティズムと袂を分かち。ブランダムが古典的プラグマティズムから離れる地点はどこにあるのだろうか。ブランダムはプラグマティズムを広義と狭義に区別する。狭義のプラグマティズムとは, 欲求の満足度を高めることに成功する傾向によって, 信念の価値を決める考え方である。広義のプラグマティズムとは既にカントで始まっていた実践の優位に集中する運動であり, そこには古典的プラグマティストだけでなく, 初期ハイデガー, 後期ウィトゲンシュタイン, クワイン, セラーズ, デイヴィッドソン, ローティ, パトナムなどが含まれる。これら二つのうち, ブランダムは広義のプラグマティズムのほうが, はるかに重要だと言う。古典的プラグマティズムは, 広義と狭義の両面をもつが, ブランダムは狭義のプラグマティズムに対して批判的である。

狭義のプラグマティズムは「道具主義的プラグマティズム (Instrumentalist Pragmatism)」と言われる。ブランダムによれば, 道具主義的プラグマティズムは, 四つの点で間違っている。第一に, この立場によれば, ある信念の妥当性は, それが行為を導いて, 望んでいた結果を得ることができることによって, 確定する。しかしブランダムによれば, この立場は信念から行為の帰結への下りの流れ (downstream) だけ見て, 上りの流れ (upstream) つまり信念に先行するものを見ていない。第二に道具主義的プラグマティズムは, 行為を正当化したり, 産出したりするさいの信念の役割だけを見ており, 他の信念を正当化したり, 産出したりする信念の役割を見ていない。第三に, 行為の成功や失敗から信念の内容に移ろうとする際には, 第三の構成要素として欲求, 選好, 目標, 規範という構成要素が必要であるが, 道具主義的プラグマティズムは, これを無視している。例えば傘を閉じるという行為は, 雨が止んだという信念によって正当化されるが, 同時に「私は雨に濡れたくない」という欲求が持続的に存在していなければならない。第四に道具主義的プラグマティストは, 行為の成功と欲求の満足を同一視するが, これは正しくない。

ブランダムによる道具主義的プラグマティズム批判の要点は何であろうか。ブランダムは道具主義を「ローカル」なものと「グローバル」なものに区分する。ローカルな道具主義は, 個々の概念, ことば, 信念を, 先行する目的を実現するための道具と見なす。グローバルな道具主義は, 推論実践の全体を, ある先行する目的のための道具と見なす。しかしブランダムはローカルとグローバルとを問わず, 道具主義を否定する。言語的な推論実践は, その実践に先立って与えられた目的を実現するための道具ではない, というのである。道具主義によれば, 先行的に与えられた目的は前言語的な所与であるが, そのような所与の概念は, セラーズの言う「所与の神話」に陥っている。目的は予め措定できるのではなく, 「諸目的の理解可能性自体が我われの言語能力に依存する」(Brandom, p. 80)。

こうしてブランダムは, 言語的推論実践の一定程度の自立性を唱える。「言語的 know-how は本質的に生産的, 創造的であり, その意味は, 熟練した言語実践者は無際限な数の新しい文を産出し理解することができるのであり, 言語実践の核はその能力の行使に, その本質がある,

ということである」(Brandom, p. 81)。公共的－歴史的な言語的推論実践への参加者は、その実践を支配する規範に一定程度制約されているが、逆にそれによって生産的、創造的な言語的推論実践が可能になる。このような、一定程度自立した言語的推論実践の動態を陽表面化するのが、ブランダムの合理主義的プラグマティズムである。

最後に、ブランダムの立場に対して若干のコメントをしておこう。言語的推論実践の創造性を強調するブランダムの立場は、恩師ローティを彷彿させる。ローティには「言語的観念論(linguistic idealism)」と言える側面がある。ローティは一面で、言語の詩的、世界開示的位相を強調するニーチェ的プラグマティストでもある。しかしブランダムはローティのロマン主義的側面を受けつがいない。ブランダムによれば、ロマン主義とプラグマティズムは「第一の啓蒙」の熟知主義に対する反感を共有するけれども、プラグマティズムは、ロマン主義のように思考、経験、科学に対する感情、直覚、芸術の優越性を主張しない。「プラグマティズムは抽象的な言うこと(abstract saying)よりも理知的な行い(intelligent doing)で表現される、知的というよりも実践的な理性概念を提供する。変わることをない普遍的原理の支配よりも、柔軟性と順応性が、その理性概念の顕著な特徴である。それはプラトンの理性であるよりも、オデュッセウスの理性である」(Brandom, p. 41)。この引用文は古典的プラグマティズムについて述べたものであるが、ブランダム自身の理性概念でもあると思われる。

それではブランダムは合理主義的な言語的観念論者と言えるのだろうか。結論から言えば、ブランダムは広義の自然主義者であり、歴史主義と自然主義の総合的把握を目指していると解釈できる。ブランダムは古典的プラグマティズムが、種の水準での進化と、個人の水準での学習は共通の選択的構造をもつことを洞察したことを指摘する。この洞察は自然進化と学習による成長——一般化すれば自然と文化——の連続性への道を開く。ブランダムが、この洞察を否定しているとは思われない。ちなみに、ハーバーマスは近年、自然進化と個人の成長の連続性を認める自然主義的立場をとっている。評者もまた、彼らとある程度共通する文化的自然主義(Cultural Naturalism)の立場をとっている(加賀, 2009年 a)。私見では「歴史主義と自然主義の総合」と要約できるブランダム、ハーバーマスの立場がプラグマティズムの到達点であり、この地点に至る道程と、この地点からの展望を描くことが、現在における我われの課題と考えられる。

参考文献

- Michael, Bacon, *Pragmatism : An Introduction*, Polity Press, 2011.
- Robert B., Brandom, *Perspectives on Pragmatism : Classical, Recent, & Contemporary*, Harvard University Press, 2011.
- 加賀裕郎 『デューイ自然主義の生成と構造』, 晃洋書房, 2009a.
- 加賀裕郎他編 『現代哲学の真理論—ポスト形而上学時代の真理問題—』, 世界思想社, 2009b.
- 岡本裕一朗 『ネオ・プラグマティズムとは何か—ポスト分析哲学の新展開』, ナカニシヤ書房, 2012.
- Richard, Rorty, *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979.